

# 私の生き方をまるっきり変えた車椅子バスケとの出会い。熱く激しい戦いは、きっと皆さん的心も動かします。



## Special Interview スペシャルインタビュー

網本 麻里さん

あみもと まり

1988年生まれ。大阪府大阪市出身・在住。クラブチーム「カクテル」に所属。2011年プライスウォーターハウスクーパース(株)入社。16歳で車椅子バスケットボールの日本代表に選出され、2008年の国際親善試合では日本人唯一の優秀選手に選ばれている。同年、北京パラリンピックの日本代表チームに参加し、7試合で133得点をあげて大会得点王に。2011年にはU25女子世界選手権で、世界記録となる1試合51得点を記録している。車椅子バスケ体験教室や講演会にも熱心に取り組み、東日本大震災にあたっては被災地にも駆けつけた。「国内外でしのぎを削る仲間やライバル。困難に立ち向かう勇気をくれる人々。そうした出会いのすべてが自分の財産であり、車椅子バスケをやっていて良かったと思える瞬間」と話す。愛称は「麻里ちゃん」

スピード、テクニック、パワー…。スポーツのドラマチックな要素をすべて備えた車椅子バスケットボール。現在では全国で80チーム、約70人が日本車椅子バスケットボール連盟（JWBF）に所属しています。女子のチームは7チームですが、2000年のシドニーパラリンピックにおいては銅メダルを獲得しています。2月16日（木）から三日間は、国際親善女子車椅子バスケットボール大会（大阪CUP）が大阪市中央体育館で開催します。そこで今回は日本代表の頼もしい得点王、網本選手にお話を伺いました。

—車椅子バスケを始めたきっかけ教えて下さい。

網本 小学3年生の頃からミニバスケに夢中になりました。しかし、私は生まれつき右足首に障害があつて、歩けるようになつたのも2歳の時に手術をしたから。中学時代に再手術が必要になり、しかも手術後は運動できなくなると聞かせられたんです。

—大好きなバスケットもできなくなると…

網本 もの凄いショックで毎日泣きじゃくっていました。



2011年12月21日 大阪市中央体育館にて

—当時は、今ほどメジャーではありませんでしたね。

高校1年生の春。海外へ親善試合に行つた際、対戦チームのレベルの高さにびっくり。帰国後すぐに関西唯一の女子車椅子バスケットチーム「カクテル」へ入団したんです。

—そこから網本選手の快進撃がスタートしました。

—地元の応援も大きかったのでは?

—2月には国際親善女子車椅子バスケットボール大会（大阪CUP）が控えています。

網本 母親が訪ねた「大阪市長居障害者スポーツセンター」は、日本初の障害者スポーツセンター。車椅子バスケットの練習も盛んで、それを知った母親が元気の無い私を半ば強引に連れ出したんです。目の前で車椅子バスケを観た瞬間、私は「またバスケができる!」との思いだけで胸がいっぱいにならなくなつたんです。

網本 北京パラリンピック日

本代表の通知が来た時は、母親と抱き合い、お互い泣いて喜びました。国際大会の得点王や優秀選手に選ばれたのは負けん気が強く、それがプレイに活かせた結果だと思います。しかし、車椅子バスケは独特的のルールで成り立つことで、障害の度合いが軽い選手が目立つ競技。それにも関わらず自分のできることを懸命に頑張り、私にバスをつないでくれた重い障害のチームメイトには感謝の気持ちでいっぱいです。

ホーム特有の雰囲気に飲み込まれ、私はプレイがカラ回りしていたんです。そんな中で巡ってきたフリースロー。場内のざわめきが最高潮に達した後、一瞬の静寂が訪れ、そこで聞こえてきたのが「麻里ちゃん、頑張れ!」だったんですね。ふと我に帰り、とても心が落ち着きました。入魂の一投は見事にネットを揺らし、その後ものびのびとプレイができる、同大会の得点王に選ばれたんですよ。

網本 大きな大会の度に地域の皆さんのが集まつて、体育館で壮行会を開いてくれたり、練習試合と食事会を兼ねて楽しくなり（笑）。もちろん試合会場で声援を送つてくれる方にも有難うと言いたいです。

特に印象に残っているのが、北京パラリンピックでの対中戦のこと。対戦チームの応援を宜しくお願ひします！

網本 その凄いショックで毎日泣きじゃくっていました。

網本 もの凄いショックで毎日泣きじゃくっていました。

網本 北京パラリンピック日